Ｙ女子大文芸サークル

牧草　泉

＊春・・学生食堂横のラウンジで

一.

Ｍ「ねえ、うちの大学に、文芸クラブがないって、おかしいとは思わない？」

Ｂ「そうね、でも私は文学には興味ないから、どうでもいいよ」

Ｍ「あんたのこと言っているんじゃないよ。一般論として言ってるのよ」

Ｄ「私もおかしいと思う。どこの大学にもあるよ。彼氏の大学にもあるよ」

Ｆ「あんたの彼氏ってどこの大学？」

Ｄ「Ｇ大よ」

Ｆ「あれっ、なかなかいい奴掴まえたじゃん」

Ｃ「いつまで続くの？・・。どうせ泡沫のように消えていくんじゃない？」

Ｄ「なに言ってんのよ、このバカ、私だってそれなりにもてるんだよ」

Ｃ「ほんとうかなあ」

Ｄ「どうとでも言いなさいよ。彼氏もいないくせに・・。ところで、Ｇ大の文芸サークルって部員が三十人くらいいるんだって」

Ｆ「Ｇ大が三十人なら、うちの大学のように偏差値が低いと文芸クラブなんて成り立たなくて当然よ」

Ｂ「以前はあったのよ。でも、解散したんだって」

M「あらほんと？　どうして解散したの？」
F「書ける者がいなかったんだよ、きっと」
M「あなたって、いつもひねた見方をするのね」
B「噂によると、編集長が男狂いして辞めたんだって」
M「でも編集長がいなくなったから解散っていうのもおかしいわね。誰か引き継げば済むことじゃん？」
F「文学を語れる学生がいなかったのよ。みんな頭が悪いのよ。偏差値が低いからね、うちの大学は」
C「偏差値、偏差値って、あなたの言い方は頭に来るよ。うちの学生はみんなアホばかりのように聞こえるよ」
F「だって事実じゃん。じゃあ聞くけど、あなた高校の成績はどうだったのよ。トップだったの？」
C「びりじゃなかったわよ。中ぐらいは行ってたわよ」
F「そうでしょう、トップじゃないわね。どの程度の偏差値の高校を出たのか知らないけど、それほど高くはなかったでしょ？」
D「あなた偏差値にこだわり過ぎだよ」
M「まあまあ、喧嘩はそれぐらいにしてよ。私たち喧嘩しに来たんじゃないんだから」
B「そうよ、そうよ。お茶がまずくなるよ」
M「うちの大学の偏差値が低いのは認めるよ。でも、それって関係ないわよ。文芸部の解散の理由があまりピンとこないわね。男狂いって個人的な事件じゃないの？」
B「それがね、投稿を掲載する、しないで編集員の間で意見が衝突したんだって」
F「じゃあ、結構原稿は集まったっていうことじゃん？」
B「そうよ、原稿は集まったのよ。でもねえ、その原稿っていうのは編集委員が頼み込んで集めたのよ。だからみんな自分が頼んで書いてもらった原稿を載せたがったのよ。つまり、そうしないと書いてもらった人に顔が立たないっていうわけなのよ」
D「でも書いた人って必ず載るとは限らないってことぐらいは知ってるんでしょ？」
B「書いた人は覚悟しているはずよ。文芸誌のページ数は当然決まっているんだから。A‐5版で百五十頁前後の冊子だそうよ。恐らく四百字詰め原稿用紙四百枚程度になると思うわ。問題は編集委員なのよ。自分の持ち込んだ原稿を載せたい気持ちってわかるでしょ？　編集委員といっても三人だったそうだけど」
F「原稿用紙で何枚なの？」
B「原稿用紙は原則として一人につき五十枚プラス十枚以下だったんだって」
F「じゃあ八編程度が掲載可能だってことなのね」
B「そうなるわね。作品によっては原稿用紙の枚数は増える場合もあるからって、紙面にはかなり幅を持たせていたんだって」
C「でも変ね、三人なら表決すれば直ぐにでも決まりそうなのにね。いったい何編集まったの？」

B「編集委員三人に編集長を加えた四人で決めることにしていたっていう話よ。全部で十三編集めたそうよ」
F「十三編とはすごいね。うちの大学生としては驚異的だよ。アンビリバブルだよ」
C「それぞれ一長一短あった？　つまり団栗の背比べだった？」
B「それもあるのだろうけど、原因は他にあるのよ」
M「編集委員会議が自爆した直接の原因は何なのよ？　作品でもめたぐらいでは自爆なんてありえないはずだけど」
B「よく知らないけど、編集長が、『四畳半ふすまの下張り』風な作品を強力に推薦したんだって。そうして、延々と推薦・口上したんだって」
F「それって、悪くないじゃん？　誰だって作品が良いと思えば推薦するよ」
B「でもその作品自体がエロ本の域を出ていなかったらしいよ。だから他の三人がみんな掲載に反対したんだって」
C「あら、二対二で決まらなかったんじゃないの？」
B「表決は三対一だったのよ」
D「じゃあ、それで不掲載は決定じゃん。問題ないはずだよ」
B「この評決に、編集長が逆上したんだそうよ。そうして、これを載せないなら、私は編集長を辞めると言ったんですって」
F「それで編集会議は空中分解ってわけ？　それって編集長のわがままじゃん？」
B「そこまではよかったのよ。逆上しただけだから。説得が可能だったのよ。ところが、そのあとがいけなかったのよ」
M「なにがあったの？」
B「それはね、編集委員の一人が、『それ編集長が書いたんですか？』って、実に生々しいけどって言ったのよ。それで編集長が切れちゃったのよ。そう言ったあとニヤニヤしたのも気に障ったらしいよ」
C「でもその程度の茶化しで切れる方がおかしいよ」
B「まだあるのよ。他の一人が折りたたむように、これはエロ本そのものだって言ったのよ。そうしてさらに駄目押しのように、宇能鴻一郎や富島健夫よりエロだってね」
D「それで編集長は飛び出したってわけ？」
B「そうなのよ」
F「あれっ、そんなこと言った編集委員がいるの？　見捨てたものじゃないわね。宇能鴻一郎って作家はね、『鯨神』という作品で芥川賞を取ったのよ」
B「あら、あなた詳しいのね」
F「これぐらいは知ってるわよ。この作品はね長崎の平戸が舞台なのよ。いい作品だよ」
M「でも、あの文体で多くの作品は生み出せないと思ったわ。緊張に緊張を重ねた、張り詰めた文体だよ」
F「あなたも詳しいのね。そうなのよ。歌人の馬場あき子が『歌枕をたずねて』という著書を出してるけど、その文

体はね、和服を着て一里の道を歩いても着こなしには一糸の乱れもない、というような文体なのよ。読む側も終わりまで緊張し続けだったよ。あの文体では馬場あき子も多くの著書は出せないわね。あんな緊張は長く続くものじゃないよ。ちょうどそれと同じなのよ。宇能鴻一郎の文体が」

M「馬場あき子の文体の緊張感が宇野鴻一郎の文体にもあるということなのね。彼が、ポルノにコペルニクス的回転をした本当の原因はわからないけど、『鯨神』を読む限り、その謎の一端には触れたって気がするわ」

F「そうなのよ」

B「編集長に乗せられてポルノに走ったという説もあるけど、あの緊張感は長くは続かないわ。私も読んだことがあるけど、いかに宇能鴻一郎に文才があるといっても、あの文体で多作は不可能だよ。だから彼がポルノに身を落ち着けたのは流れとしては必然だったのよ。編集者の誘いに乗る前に、すでにコペルニクス的回転をしてたってことなのよ」

D「自分が変身したのではなく、作品によってさせられたっていうわけね」

F「そうね、そう言った方が適切だよ。宇能鴻一郎は純文学の袋小路で芥川賞を受賞したのよ。でもその先に純文学の道はなかった。ポルノの道が口を開けて待っていたっていう感じだね」

B「メイド・ヒム・動詞の原形だね」

D「あら、あなたって、すごい英語力じゃない？」

B「これくらいは知ってるわよ、わたしだって」

M「でも、宇能もポルノ小説へと足を踏み入れるには大分苦悩したんじゃないかしらね」

F「そりゃあそうだと思うわ。日本では、ポルノって内実は別として、公には敬遠されているからね」

D「敬遠って、格付けが下だっていうこと？」

F「そうよ、でも物書きで生きていく限り、他に道はないと悟った？　いや居直ったのかもね」

B「そういえば、宇能の小説の分野はポルノ小説とは言わないのよ。ネットで見たら、官能小説って書かれていたわよ」

C「あら、そうなの？　やはり本人もこれ以上純文学は書けないって、気がついていたんだと思うわ」

M「彼のポルノ小説、じゃない官能小説は『鯨神』に比べるととても読みやすいわよ」

F「じゃあ、結局官能小説へ行くのも、いったん決意すれば、その後はそれほど難儀することはなかったということなの？」

C「そうなるわね」

M「あんたって、うちの大学の文学を否定しながら、自分は文学の講釈をするなんて、変な女だよ」

F「わたしのこと？」

M「そうよ」
F「このくらいは私だって知ってるわよ」
C「わかったわよ。じゃあ芥川賞をもらったのに、芥川賞に値する作品って『鯨神』だけなの？」
F「そういうことになるわね。だって、他に宇能鴻一郎の秀作って聞いたことがないわよ」
B「じゃあ芥川賞って一発屋でももらえるのね」
C「そういえばそういうことになるわね」
M「芥川賞決定後の銓衡委員の講評を読んだことがあるんだけど、『作者の今後の活躍をも期待して一票入れた』というのがあるかと思うと、『とにかくこの作品がよかったから賛成した』とか、評価の基準がばらばら、だったわよ」
F「直木賞は現に作家として活動している人って、現役であることが基準になってるのよ。ところが芥川賞はそこら当たりが不明確なのね。菊池寛は、『作品重視でよい』と言ってるんだけど、現在の選考方法はこれに沿っていないわけ。銓衡委員のフリーハンドになってるのよ」
B「そうなると、銓衡委員いかんによって、作品以前に運・不運が決まってくるのね」
F「端的に言えば、そういうことになるわね」
C「それじゃあ、まるで宝くじだわ」
D「それって直木賞の銓衡と近接しているのね」
C「そんなんじゃあ、芥川賞を設けている意味がないわよ。同じ内容の賞を二回与えていることになるよ」
B「そういえば、芥川賞も直木賞も主催は同じX出版社だよね」
F「そうなのよ、だから批判も強いのよ。マスコミ関係者が言ってたわよ。どちらでもいいから他の出版社に権利譲渡をしたほうがいいってね」
B「それがいいわね。今までとは違ったアイデンティティが作品に生まれて、文学の発展にも寄与する気がするわ」
C「賞の譲渡は困難だわよ。文学賞は会社にとってもいい稼ぎになるからね」
F「そうなのよ、また歴史があるし、権利を譲渡しなくてもいいわよ。でも、マスコミからも、文芸評論界からもさらには読者からも批判がでているのだから、やはり菊池寛が言ったように、芥川賞は百パーセント、作品で選考すべきだと思うわ」
C「芥川賞と直木賞の住み分けができるから？」
M「そうよ」
D「それって、一発屋と多発屋の違いみたいよ」
F「それもあるわよ。それともう一つ、全国の同人誌の作品も芥川賞のチャンスが今より確率が大きくなると思うのよ。中堅の文芸評論家も言ってたわ。もう少し同人誌の作品に目を向けるべきだってね。これは同人誌の中にも芥川賞に値する作品があるってことを言いたかったんだと思うのよ」

C「今は、文学賞も、出版社の経営に後塵を拝しているようね」
F「時代が時代なのよ。活字文化が衰退期を迎えているからね。経営も大変なのよ」
D「芥川賞をもらっても、ドドンパッと、消えていく作家って、どのくらいいるのかしらね」
M「うわさの域を出ないけど、四十パーセントはいるんじゃないの。いつだったか、週刊誌が報じていたわ」
C「それって多いわね」
F「銓衡に問題があるとは言いながら、これでも作品重視の銓衡がなされていることが分かるんじゃないの？」
C「文学賞のことはそれくらいにして、揉め事はその後どうなったのよ？」
B「それって、その後の噂では、あのエロ本は自分で書いたのではなく、彼氏が書いたのではないかっていうことだったわ」
F「そうなら男狂いが原因ってことじゃないじゃん？」
B「その後に男と同棲して講義に出なくなったのよ。その男というのが会うたび違う男っていう噂なのよ。この噂が原因で男狂いってことになったんじゃない？」
C「つまり、単位も落として四年で卒業は無理ってこと？」
B「いずれ、結局そういうことになるんじゃない？　女って、彼氏ができると、他のことは目に入らなくなるから」
M「結局、他の編集委員も嫌気がさしてトンズラってわけ？」
D「十三編も集まったのなら、偏差値の低い大学に文学はないってことは成り立たないよ」
F「みんなエロ・グロだったのかな」
M「あんたって、やっぱりひがんでるわね」
B「Fさんはね、有名な一流高校出身なのよ。有名大学に失敗してここに来ているのよ。だからすねてるのよ」
F「勝手なこと言わないでよ。いつ、私がそんなこと言ったのよ？　ありもしない風聞を流さないでよ」
M「でもあなたの態度っていつもそうじゃん？　誰だってそう思っているわよ」
C「まあまあ、そのくらいで二人とも収めてよ」
D「偏差値の低い女子大に文学はないって説はおかしいわよ。G大のアメリカ文学の教授が言ってたそうよ、『私が文学を専攻したのは、もともと文系向きであったことは事実ですが、文学には貧富・貴賤・学歴などの差がないからなんだ』って」
F「それは言えるわね。学歴なしの作家って松本清張、室生犀星、村田喜代子など多士済々よ」
B「文学は、どんな環境でも芽吹くってことなのね」
M「文芸サークルって、大学からいくらか補助がでるの？」
D「サークルは体育系と人文系があって、それぞれ大学から補助が出るのよ。体育会系が断然多いけどね」
C「文芸部がつぶれたのもその補助金の使い方に問題があったんじゃないの？」

B「それはなかったそうよ。顧問の古川先生が言ってたそうよ」
F「古川先生って専門は何なの？」
B「英文学よ」
F「英文学のなによ？」
B「アメリカ黒人文学だよ。アリス・ウオーカーに詳しいらしいよ」
F「自分で創作はしないの？」
B「創作は関心ないようよ」
F「サークルが空中分解するなんて、人文系サークルだから？　体育会系もそうなの？　やはり内輪もめなんてあるの？」
M「体育系のサークルは、内輪もめはほとんどないのよ」
F「どうして？」
M「先輩・後輩の関係が強いのよ」
C「一年生は上級生のユニフォームの洗濯や肩もみなどもさせられるんですって」
D「ほんと？　それは地獄だよ」
M「でも、一年我慢すれば新入生が入部してくるから地獄から抜け出せるのよ」
C「グランドでは先輩後輩の主・従関係は全くないんですって」
D「グランドでは実力主義なのね」
B「その点、人文系サークルは気楽でいいよ。何時退部しても文句は言われないからね」
M「そうでもないらしいわよ。なかなか辞めさせないサークルもあるらしいわよ」
C「サークルによっていろいろなのね」
D「じゃあ、文芸サークルはどうなのよ？」
B「文芸サークルは自由に辞めてもいいんだって。私の友人、三か月で辞めているのがいるのよ。先輩からも何も言われなかったそうよ。間違いないよ」
F「そんなだから編集委員が言いたい放題で纏まらなかったのよ」
M「文芸関係の人間は神経質な人が多いからね。妬みとか嫉妬が非常に強いのよ」
C「有名作家ではよく聞くけどね。太宰治がだれそれと喧嘩したとか、立原正秋が高井有一と絶交したとかね」
B「物書きって、誰でも神経質じゃない？　そうして我が強く、要するに偏屈なのよ」
B「それらをコンパクトにしたのがうちの文芸サークルなんじゃない？」
D「でも、単に編集委員が喧嘩別れをしただけなんじゃないの？」
F「いやに仰々しくなったわね。そんな人並みの感性がうちの学生にあったの？　信じられないよ」
C「また始まった、一講釈してからこき下ろすんだから」
B「文芸サークルの再建話もあるのよ」

M「誰が立ち上げるの？」
B「まだ知らないけど古川先生が言ってたわよ。文学部がありながら文芸サークルがないのはおかしいって」
F「でも、私がやりますって言うほどの学生が出てくるのか怪しいよ」
C「そんな奇特な人はいないって言いたいんでしょ、あんたは」
D「でも古川先生がそう言っていたのなら誰か目星をつけた人がいるんじゃないの？」
F「いれば奇跡だよ」

＊夏・・同じラウンジで

二.

B「文芸部の解散事件ね。本当の原因はやはりエロ原稿を載せるか載せないかで喧々諤々になって、それが直接の原因なんだって」
F「そのエロ原稿の作者は編集長だった？」
B「そうなんだって。他に載せてもいい原稿もあったのに編集長がごり押しをしたんだって。古川先生も顧問として、集まった原稿は見たんだって。そうして古川先生もそのエロ原稿の掲載には反対したんだそうよ。理由は、うちの大学は昔から〈よき家庭人を育成する〉というのが教育指針だから、この作品には問題がある。だから今回は不掲載の方向で考えようって言うことなのよ」
F「顧問教授の監視ってこと？」
C「そうなのよ」
M「そうすると、いずれにしてもその原稿は相当低次元のエロだったのね」
B「どの程度のエロなのか、原稿を見たことがないから何も言えないけど」
F「たぶん、エロ以外に何もなかったということなのよ」
B「その文芸サークルね、かなり再建が具体化しているそうよ」
M「具体化って？」
B「立ち上げ人が決まったんだって」
C「立ち上げ人って誰よ？」
B「よく知らないけど、長井とも子っていう人らしいよ」
D「長井って誰よ？」
B「何でも今三年生で専攻は生活科学部らしいよ」
F「あれ、理系の人なの？　それ大丈夫？」
B「専門に上がる時一年留年したんだって。しかも一浪で入ってきたんだそうよ」
C「じゃあ、大分年増だよ」
F「なに？　それ、最悪じゃん、大丈夫？　うちの大学に浪人するなんて」
B「ほら、また始まった。でも、古川先生によるとリーダーシップが取れる人だって」
M「あなた、直々に聞いたの？　あなた地理の先生じゃない

の？」
B「地理の先生ってなによ？」
M「それも知らないの？　高校の地理の先生って、自分は行ったこともないくせに、世界一周してきたかのように教えるじゃない」
B「ああそういうこと？　古川先生から直接聞いたっていう友人から教えてもらったのよ。だから大筋では間違いないわよ」
F「それって伝聞じゃないの？　大丈夫？」
B「彼って、嘘を言う人じゃないわよ」
C「じゃ、文芸サークル再建は本当なんだ」
B「予算もいくらか下りるんだって」
F「でもねえ、人が集まるのかよ」
B「何人かには打診したらしいよ」
M「古川先生が？」
B「いや、長井さんだよ」
D「あれ、もうそこまで行っているの？」
B「私も誘われたのよ。あなたは文学的才能があるって、その友人からだけど」
C「あなたって、ついこの前私は文芸サークルなんかに興味はないって言ってたじゃん？」
D「どんな心境の変化なのよ？」
B「私も始めは断ったのよ。私は興味ないって言ってね」
F「そうしたら？」
B「そうしたら、その人は熱心に、あなたに文才があるのは一目で分かるわって言われて・・」
F「あなた、ほめ殺しに弱いのね」
M「えっ、あんたもう入部することにしたの？」
B「ううん、断りきれずにね。親しい友人だから断りきれなかったのよ」
F「へえ、そうなの。入部して悪いわけではないけど。でも、あんた、本は読んだことあるの？」
B「いくらばかでも本ぐらいは読むわよ」
F「どんな本？　例えば？」
B「あなた失礼ね、私だって好きな作家はいるのよ」
D「へええ、新発見だわね」
B「私は清張が好きなんよ」
C「松本清張？　古くて、少しダサいんじゃない？」
D「ダサいでも、大したもんよ、好きな作家がいるってことは」
M「清張のどこが好きなの？　醜男だし、たらこ唇で、感じもちょっと暗いし・・、あんた、あのたらこ唇に惚れたの？」
B「容姿じゃないわよ。その暗いところが好きなのよ。それに人生の前半は苦労の連続だったし、彼って遅咲きの人間なんよ。それに感情を抑制した文章はたまらないわよ」
F「へえ、人は見かけによらないわね」
C「あなたが文芸部に入部する資格があるのなら、私だって

堂々と入部できるわね」
D「私も自信が出てきたよ」
M「ねえねえ、みんな好きな作家を出してみたら面白いんじゃない？」
D「そうね、そりゃあ面白いな」
C「じゃ私から、私は立原正秋が好きだな」
D「私は太宰治」
M「私は室井佑月」
C「室井佑月ってポルノ作家じゃん？」
M「簡単に断定しないでよ。本人はなるほど、オマンコ作家と自ら言い触らしているけど、単なるポルノ作家とはちがうんだよ。一度読んでみてよ」
C「そう？」
B「Fさん、あなた誰が好きなの？」
F「言ったからって意味ないじゃん」
M「大いにありよ。その人柄が知れるじゃない？」
F「私の人柄が？」
M「そうよ、付き合うからには、いろいろ知りたいのよ」
C「さてはこの間、したり顔に解説した宇能鴻一郎でしょう？」
D「Fさんってポルノ専門なんよ」
F「何言ってるのよ。私だって好きな作家はいるよ」
D「誰？　言ってよ」
F「私はね、島崎藤村」
D「なーんちゃって、でもいい線いってるじゃん」
M「みんなそれなりの本を読んでるじゃない？　偏差値は余り気にしないでいんじゃない？」
B「Fさん、偏差値が出たよ。どうなのよ？」
F「でもねえ、みんな背伸びしているんじゃない？　かっこつけたりしちゃってさ」
M「みんな嘘は言ってないと思うよ。あとでばれたら、ひねくれ者のあなたからコテンパンにやられるからね。Fさん、あなたって監視役になってるのよ。つまり若干敬遠されているってこと」
F「何よ、私って個人主義なんよ。干渉しないわよ」
C「それにしては、いろいろいちゃもんが多いわよ」
D「こうしてみると、意外とみんな古いんだな、現代作家としては室井佑月だけだよ」
F「まさか、高校でならった作者の名前を挙げただけじゃないんだろうね？」
C「それはないと思うよ。すぐばれるよ。それなりに、つまり偏差値が低いなりに、一応は読んでると思う」
M「五人でこの程度の作家がでるということは、うちの大学でもまだまだ次元の高い読者、文学愛好者がかなりいる可能性があるってことなのよ」
C「何よ、私たちは低次元だっていうの？」
F「それは間違いないよ。偏差値が低いんだから」
D「偏差値、偏差値、いい加減にしてよ。授業料払うのがば

かみたいじゃん」
C「大体、大学の文芸クラブって、投稿者は部員だけ？　あるいは学内に限定するの、あるいは学外からも募るの？」
B「大学によってそれぞれ違うようよ」
M「三田文学などは積極的に学外の投稿を呼びかけているよ。例えば岡松和平はW大出身だけど、三田文学は彼の作品を載せているし・・」
C「内輪だけの作品しか載せないのでは発展がないよ。この顔ぶれの作品なんて読む気がしないわよ。英会話サークルを見習うべきだよ。G大と盛んに交流会をやってるよ」
F「ああ、あれって、彼氏ハンティングに行ってんのよ。英語なんて、どうだっていいのよ」
C「そんな言いかたないでしょ」
D「英会話サークル部員に失礼よ」
F「だって本人たちがそう言ってんのよ」
C「G大生を釣り上げた人っているの？」
F「二、三人いるそうよ。デートしたっていうのがいたわよ」
M「Dさんって、英会話クラブのメンバーでもないのに、彼氏はG大、すごいよね」
F「そういえば、そうだね」
G「人のことより自分のことをしんぱいしたら？　彼氏っていないんでしょ？」
M「いずれにしろ、弄ばれて捨てられて、ってなるんじゃない？」
F「その可能性大ありよ」
D「またまた、失礼なこと言わないでよ。でも、英会話サークルっていうけど、ほんとに英語が喋れる人いるの？」
F「一年次は英検二級が二、三人だそうよ。でもね、三年生、四年生になると準一級合格者が二、三人出るらしいわよ」
M「準一級が出れば大したものじゃん」
C「見くびっては駄目よ。一級合格者もいるのよ」
M「じゃあ、結構存在価値は大きいんだね」

＊秋・・同じラウンジで

三.
C「学外者については、どうなるの？　前例に倣うの？」
D「そうだわね。うちの大学でもやはり外部の投稿者に扉を開いておくべきよ」
F「私もそう思うよ。内内でこそこそやっても発展性はないわよ」
M「そういえば、結局、五人すべて文芸部なのね」
D「何か、やらせのようね」
C「でも偶然ってやつよ。申し合わせて入ったんじゃないから」
F「でも関心ないって言ってたBさんまで入部するとはね。信じられない」
D「おだてられたから入ったのよ。あなただって褒められれば悪い気はしないでしょ？」

F「そりゃそうだけど。関心ないってあれだけはっきり言ってたくせに」
M「あなた、Bさんの入部に反対なの？」
F「そんなことはないわ」
M「じゃあ、問題ないじゃん？」
D「サークルの名称は決まったの？」
C「まだよ。今度の設立総会までに決めるって言うことだよ」
D「誰が決めるのよ？」
C「誰の提案でもいいものがあればそれにするって言ったわよ」
F「誰が？」
C「長井さんよ」
F「でもそんな情報は真っ先に部員に流してくれないとね。余りに勝手だよ」
D「あなた誰に聞いたの？」
C「私は偶然に長井さんに会ったのよ。図書館でね。入部しましたって挨拶したら、ああそうなの、こちらこそよろしくねって言って、そのあとよ、彼女がつぶやくように言ったのよ」
M「サークル名なんてどうでもいいわよ。ところで、以前の文芸サークルの正式名称は何だったの？」
C「Y大文芸サークルだったそうよ」
M「じゃ今度もそれでいいんじゃない？」
F「それはちょっと抵抗があるんじゃない？」
M「どうして？」
F「だってそうでしょ？　Y大文芸は空中分解したのよ。同じ名前なんて縁起でもない」
C「あら、あなた縁起を担ぐのね。古臭いよ。あなた、ど田舎出身なの？」
F「なぜ？」
C「田舎ではよく何事をするにも祈祷師に占ってもらうことがあるじゃん」
D「あなた今二十一世紀だよ。どんな田舎でも祈祷師なんてほとんどいないわよ」
C「そうかな？　私の故郷では時々そんな話し聞くけどね」
D「あなたの故郷がど田舎なのよ。ところで、サークルの名前はどうするの？　誰が決めるの？」
F「長井さんが勝手に決めるつもりなんじゃないの？」
M「さあどうだかね」
F「でもY大文芸サークルは困るわ。私反対よ」
M「今度のサークルも前途多難だよ。縁起を担ぐ変なのも入っているからね」
F「新しい出発だから新しい皮袋には新しい酒が必要なのよ」
M「勝手なことを言って。中身が大事なんだよ、中身がね」
F「長井さんが責任者のような話になっているようだけど、誰が決めたのよ？」
C「それはね古川先生だよ。強力な編集長が必要だと言ってたそうよ。だからそれに長井さんが適っていたのよ」

F「総会を開いて決めるのが本当だと思うんだけど」
M「そんなこと言ってたら何も決まらないよ」
C「あなた編集長になってみたいの？」
F「そうじゃないけど・・。編集長によって作品の取捨選択が違ってくると思うのよ」
D「それはそうだけど。彼女が勝手に決めるわけではないから心配要らないよ」
F「でも以前のY大文芸も編集会議で自爆したんでしょ？」
M「そりゃあそうだけど。今度はうまくやると思うよ」
D「編集委員は何名にするのだろう？」
M「編集委員は多ければいいものではないから、やはり四、五名じゃないかしらね」
C「挙手で決める場合もあるから、奇数がいいのよ」
M「じゃあ編集長を入れて五名、つまり編集委員は四名ということになるよ」
D「これはY大文芸のときと同じだよ」
M「あなた、それでいいの？」
F「それは構わないよ。要するに誰が編集委員になるかが問題なのよ」
D「あなた、いやに組織のことが気になるようね」
F「そりそうよ。組織が一番問題だよ」
M「組織より創作だよ。どういう作品が出てくるかってことなんよ」
D「ところでBさん今日は来てないわね。どうして？」
C「アルバイトよ。友人から頼まれてピンチヒッターなのよ」
D「何してるの？」
C「レストランの皿洗いよ」
F「へーあの人がね。見直したわ」
C「あの人日曜はほとんどいないよ。多分アルバイトなのよ」
M「小遣い銭稼ぎでしょ？」
C「そうでもないらしいよ」
D「そういえば、いつだったか仕送りが少ないってぼやいていたことがあったわよ」
F「うちの大学ってアルバイトしてまで来るような大学じゃないよ」
M「でも四年間もいれば何か学んでいくんじゃない？」
C「Bさんって結構彼氏と出歩いているって聞いたわよ」
M「生活費を稼いで、彼氏と遊ぶんじゃあ、いくら金があっても足りないわ」
C「夜もスナックでアルバイトしてるらしいよ」
D「それで分かったわ。あの人の情報源はアルバイト先なのよ」
F「今度の文芸サークルに入会したのも、その情報を買われてじゃないの？」
C「あれだけ雑学に詳しければつかえるよ」
D「彼氏ってどんな男？」
C「S大生よ」
M「すごいじゃん、旧制大だよ。一流大学だよ。どこで捕ま

えたのかしらね？」
C「友人の紹介だって言ってたわよ」
F「あんた誰から聞いたの？」
C「本人からよ」
M「あの人って、あっけらかんだからね」
D「じゃあエッチでも忙しいのよ、多分」
C「何よ、人事のように言って、あなただって、授業にはせっせと出てくるけど、その他の時間はエッチの時間でしょ？」
D「失礼だわね、エッチばかりしているように聞こえるじゃないの。勉強もしてるわよ」
F「偏差値が低い大学の学生は、エッチには長けているのよ」
D「あなた彼氏いないの？」
F「失礼ね、いるわよ」
C「本当？　あなたに寄って来る彼氏っているの？」
D「私もそう思う」
F「勿論いるわよ」
D「どこの大学生？」
F「大学生じゃないわ、会社員よ」
D「あら、どこの会社の人？」
F「秘密よ。あまり根掘り葉掘り聞かないでよ。品がないよ」
C「あなたのようにひねた性格の女は男って敬遠するのよ」
D「蓼食う虫も好き好きなのよ。世の中変人も、たくさんいるってことなのよ」
F「何言ってるのよ。あんたの彼氏よりは男前だよ」
M「まあまあ、ここでは彼氏がいるってことにしようよ」
D「Fさんに彼氏がいるってことは、みんな彼氏がいて当然ってことなのよね」
C「当たり前じゃん」
M「ちょっと訊くけど、あなたたち避妊はどうやってるの？」
C「私はコンドーム」
D「私は外出しよ」
M「へえ、外出しね」
C「あなたはどうしてるの？」
M「私はピルを使ってるけど、外出しってちょっと可哀想な気がするわ」
C「彼氏文句言わない？」
D「文句言わせないのよ」
M「多分内心いらいらしているわよ」
C「外だしは、射精したあとにいやな感じが残るのよ」
D「でも生だからコンドームより気持ちいいんじゃない」
M「そうねえ、コンドームをつけると快感が半減するっていうからね」
D「だから生でさせるのよ」
M「でも危ないよ。妊娠の可能性大有りだな」
C「妊娠の経験ないの？」
D「一度もないよ」
C「ひょっとしたら、あなた不生女かもよ」

D「変なこといわないでよ。立派な子供を生もうと思ってるんだから」
C「今の彼氏の子供？」
D「そりゃ分からないわ。今の彼とはどうもしっくり行かないのよ。だから別れようかとも思っているのよ」
C「中絶したことはないの？」
D「中絶したことはないよ」
C「ふうん、みんなうまくやってるんだな」
D「Bさんね、二回中絶してるのよ。二回目には医者から、母体を壊すから中絶しないようにって、注意を受けたと言ってたよ」
M「セックスって何のためにあるのかしらね？」
D「私も時々そう思うことあるよ」
C「決まってるじゃん、種族保存のために神が与えた神聖なものよ」
M「でも性行為はいやらしいだけだよ。気持ちはいいけどね。どうしても神聖とはいえない気がするよ」
D「あなた、やってるとき、これは神聖な行為だと思っているの？」
M「そう言われると、どう答えていいのか、迷っちゃうよ」
C「性行為で子供が生まれるのだから、エッチっていえないのじゃない？」
M「じゃあ、あなたアダルトビデオを見ても神聖な行為だと思うの？」
C「それとこれとは別よ。あの人たちは遊びと商売なんだから」
M「でもＡＶ俳優がやっていることと、あんたが彼氏とやってることって同じじゃないの？」
C「私は彼が好きだから、また彼も私を好きだからやってるのよ。ＡＶ俳優とは違うよ。商売でしているわけではないからさ」
M「でも、ＡＶ俳優だって好き嫌いがあるんじゃないの？だから互いに好きであれば神聖だっていうことになるわよ。性行為そのものは全く同じじゃん」
D「そうよ、同じなのよ」
F「あなた、セックスしているとき何を考えているの？」
C「えっ、なにをって、何も考えていないわよ。気持ちいいから」
M「でも、妊娠しないようには心がけてるんでしょ？」
C「それは当然よ、妊娠したら大変だもん」
D「中絶するには相当な費用が入用だし、母体は傷つけるし・・」
F「じゃあ、あんたたちの性行為は子供を生むための行為じゃないってことよ」
D「そうよ、それは認めるわ。単なるエッチな行為なのよ、いわゆるいやらしい行為なのよ」
F「あなたたち、自分の性行為を神聖な行為にしようたって無理だよ」

C「ねえねえ、性行為を中性でニュートラルな行為って定義したらどう？」
F「それって何よ？」
C「神聖でもなくいやらしいものでもないって決めるのよ」
F「それから？」
C「そうするとエッチしたいときはいやらしい行為になるし、子供をつくりたいときは神聖な行為になるし・・」
M「一見分かりやすくすっきりした定義だけど、性行為そのものはさっき言ったように同じじゃん？」
D「じゃあ夫婦間で楽しむための性行為はどうなるのよ？」
C「そのときが中性的な行為なのよ」
D「でも性行為そのものは同じだよ。心の問題になってしまうよ。外形的にはエッチな行為と神聖な行為には区別できないじゃない？」
C「そう言われると、そうだね」
F「中性論はあまり意味がないよ」
M「結局、性行為はいやらしさと、神聖さを兼ね備えているのよ」
D「分離不可能なの？」
F「不可能なんじゃないの？」
F「あの島崎藤村だって性欲を哲学や宗教に昇華できなかったから、駒子とああいう関係になったんじゃない？」
C「いやらしい、ほんとにいやらしい関係ね」
F「でも藤村をいやらしいとは誰も言わないよ。あんただけだよ」
C「当時は言われたのよ、間違いなく。ましてや明治時代だからね」
D「それが今は文学になっている」
C「私たちが、あんないやらしいことをすると、生きているときは勿論、死んだ後までも淫乱女だったと言われるんだよね。駒子だと藤村の庇護を受けて文学の一端を占める。これって、どこか変だよ」
F「それって、偏差値が低い人の考えることよ」
C「そら、おいでなすった、偏差値だよ」
F「でもね、駒子との恋愛が悪いことなの？」
C「そりゃあ、悪いわよ。してはならないことをしたわけだから」
F「でもどこが悪いのよ。お互いに好きだったんだからいいんじゃないの？」
D「いとこどうしは結婚していいのよ。藤村と駒子は三親等でしょ。叔父と姪の関係だからいけないのよ」
C「法律で決まってるのよ」
F「誰が決めたのよ？」
D「国だよ」
C「国会で決まったのよ」
M「それ以外に意味はないの？」
C「社会道徳に反するからだめなのよ」
F「民法七三四条一項には（直系血族または三親等内の傍系

血族の間では、婚姻をすることができない）と規定されているのよ。それは分かるんだけど、でも四親等間の婚姻はいいという根拠は何なのよ？」

D「この人ったら、民法まで持ち出すんだから」

C「あんた、相当しつこいわね」

D「結婚と婚姻はどう違うのよ？」

F「婚姻ってのは、法律上の手続きが完了した場合の男女関係をいうのよ」

C「結婚は結婚式を挙げただけで、市役所などに届を出していない場合とか・・」

F「四親等間までしか婚姻を認めていないのは、身体とか精神に障害を持った子供が生まれる可能性が大きいからよ」

C「理由はそれだよ。近親結婚は劣性表現型が出てくるからいけないって、生物の時間に習ったわよ。だから国で決めたんよ」

D「そういえば高校時代に教わったわね」

M「でも、それなら子供を産まなきゃあいいんじゃない？」

F「そうだよ。産まなければ劣性も優性もないよ」

C「じゃあ他に理由があるんだ」

F「その理由って何よ？」

D「そう言われても、偏差値の低い私じゃ回答は出てこないよ」

F「でも、なぜかしらね」

M「やはり、社会規範として禁止されているからじゃないの？」

C「あれ、社会規範って難しい言葉が出てきたよ」

D「社会規範ってなによ？」

M「人間がお互いに決めた行動の制限だよ」

D「じゃ、藤村もその社会規範に反していたことをしたから苦しんだの？」

C「当たり前じゃん」

F「駒子と深い関係になったのは、奥さんのフユが亡くなってまもなくなんよ」

C「じゃあ奥さんが亡くなったから、要するに性欲のコントロールができなかったってことなのね」

D「あんたと同じだよ」

C「ばか、男の性欲は衝動的だから、そこは女と根本的に違うのよ」

M「じゃあ藤村の性欲って異常に強かったんだ」

C「その異常な性欲にそそのかされて駒子をレイプした？」

F「レイプじゃないよ。駒子は藤村を愛してたんだよ」

C「じゃあ二人は相思相愛の仲だった？」

D「そう言えるわね」

M「そう簡単には結論出せないよ」

C「どうして？」

M「相思相愛の関係なら、藤村もそれほど苦悩しなかったんじゃないの？」

D「じゃあ駒子に対する性行為は、愛情よりも性欲そのもの

に支配されていたっていうの？　だから藤村は苦しんだ？」

F「お互いに好きなら性行為をすることは自然だよ。それほど悩むような問題ではないよ。駒子は藤村の子供を産んだのよ。だから駒子も藤村が好きだったのよ。」

D「あなた近親相姦を認めるの？」

F「認めるべきだとは言っていないわよ。許容できる場合があるんじゃないのかって言ってるだけよ」

D「あんた藤村文学が好きだと言ったのは、藤村と駒子が相思相愛だったからなの？」

F「そんな具体的なことを言ってるのじゃないよ。でも少しはあるかもね」

D「あんたって悪趣味だよ」

F「一般論として言ってるのよ。四親等どうしは婚姻を認めてるのに、三親等は駄目なのよ。余りにも機械的な決め方じゃないの？」

C「あんたよく知ってるのね。さっきも民法を持ち出してたけど、どこで勉強したの？」

M「驚くことはないわよ。Fさんは家族論の講義で聞いてきた事を言ってるだけなのよ」

F「そう簡単に言わないでよ。少しは勉強したんだよ」

M「家族論の古賀教授は法学部出身なのよ」

C「へえ、それにしてもFさん、偏差値の低い学生にしてはなかなかやるじゃん」

F「じつは、高校時代は、弁護士になりたかったのよ。でもねえ、成績が思うとおりにならなかったのよ」

C「だから、ここへ流れ着いたってこと？」

F「悔しいけど、結論としてはそうなるわね」

D「近親婚って昔はそれほど忌み嫌われてはいなかったのでしょ？」

M「そうよ、これって洋の東西を問わずってことだよね。ウイキペディアを見ればてんこ盛りだよ」

F「近親婚は、社会的には集団の権力分散を避けるには都合がよかったのよ」

C「じゃあ、近親相姦とは関係ないけど、封建領主が、奥さん以外に側女を持ち、血縁を求めたことと同じ次元？」

F「そのとおりだと思うわ。他人が入り込んでくると、思想信条や生活習慣が異なるから、混乱してグループの結束力が弱まるのよ」

M「ところが近親婚の弊害が顕現して、知られてきたので、避けるようになった？」

F「そう見ても間違いはないわね」

D「じゃあ、妊娠出産を伴わない近親相姦は、反社会性は少ない？」

F「私はそう思うわよ。もちろん男女の間に相思相愛の関係が成立している場合、その中に割り込んでいくような行為は反社会性があるから認められないよ」

M「分かりやすく言えば、両親健在の場合に母子相姦は認め

られない？」
F「そういうことになるわね」
C「じゃあ、あなたは、そういう障害がなければ妊娠しない限りは、近親相姦は認めてもいい、父親がいない場合の母子相姦はいいというの？」
F「認めるべきだ、とまではいかないけど、他人が干渉すべきことではないと思うよ」
D「すごいことになってきたよ。やはりあんたはユニークな女だよ。いや変なひとなのよ」
F「私は特別なことは言っていないよ。Mさんも言っているように、動物の世界も近親相姦はありふれて見られるんだし・・」
C「それって本当？」
F「本当だよ。たとえば、合意があればという条件付だけど、近親相姦を認めている国も、ロシア、オランダ、イスラエルなど十数カ国あるわよ」
C「じゃあ将来日本もそうなると思う？」
F「そうなると思うわね。たとえば父親が娘を好きで抱きしめる行為と、その行為が性行為までいたった場合とは、互いの愛情の表出には差がないと思うのよ。かえって後者のほうが、互いの愛情表現としては充実していると思うわ」
D「そうかなあ、私には分からない。思っただけでも不安になるわ。それこそ、わたしには社会規範が気になるわ」
F「そういう反社会的だと決め付ける社会こそ間違っているのよ」
M「もうそろそろ、午後の講義が始まる時間よ。続きは次の機会にしようよ。でも藤村が草葉の陰で、Fさんの意見を聞いて感激してるかもよ」

＊冬・・同じラウンジで

四.
C「部員一八名って、かなりいい線いってるんじゃない？」
F「そうね。うちの大学としてはね」
C「あんた予想外に部員が集まって不服なんじゃないの？」
F「どうしてよ？」
C「だって、あんたって、うちの大学は偏差値が低いから集まりっこないって言ってたじゃん」
F「そうだね。うちの大学としてはいい線いってる。前言取り消しだよ」
M「でも、私が編集委員になったってことは、ほかの部員はそれほど関心はないってことなのね」
F「そうとは限らないわよ」
D「で、今後はどうするんだよ」
M「どうするって、作品を集めなくてはね」
C「投稿だけでは、集まらない恐れがあるからって、編集長が言ってたけど、本当なの？」
M「それほど心配する必要はないわよ。Y文芸時代でも十三

編集まっているんだから。また、作品が多ければいいってもんじゃないから」
F「Y大文芸サークル時代だっていい作品はそれほど多くはなかったのよ。だから編集長は発破をかけたのよ」
M「Y大文芸創作部ってどう？」
D「すんなり決まったわね」
C「いいんじゃない。あまり代わり映えしないけど」
M「そうね、いまいちしっくり来ないような気がするけど、名称が限られてくるのよ」
F「名称はどうだっていいんだよ。問題は作品だよ。前回のようにエロエロ作品ばかりだと困るんだよな」
C「学生数は結構多いでしょ、へたな鉄砲も数打ちゃ当たるっていうから、大丈夫だよ」
D「先ず文芸創作部再興をみんなに知ってもらわなくてはね」
C「ビラ撒きしたらどう？」
M「それはいいアイデアだよ。早速実行しようよ。あなた文面を作ってよ」
C「いいよ。でも印刷はどうするの？」
M「大学のプリンターを使うんだよ。人文系サークルと体育系サークルに一台ずつあるんだよ」
C「ああそうなの」
M「でも、用紙はざら紙だよ」
D「それとね、原稿はフラッシュ・メモリーで出してもらうことにしようよ」
M「前回は原稿で出した人もかなりいたそうだからね」
F「フラッシュ・メモリーだと編集も相当楽チンになるよ」
M「それがいいわよ」
C「でも原稿用紙で出した人はどうするの？」
F「それは認められない」
D「そうは言っても卒業生も六十歳以上の人はパソコン駄目の人がかなりいるんじゃない？　なかには、俺はパソコンは使わないってのもいるかもよ」
F「変人はどこでもいるからね」
M「そのときはそのときよ」
C「原稿をパソコンに移すって大変よ」
M「もの書きって麻薬中毒者のようなところがあるからね。予想外の事態も覚悟が必要よ」
F「原稿持ち込みがあったら断るの？」
M「拒否するわけには行かないよ」
D「それもそうだね」
M「そんなのに限っていい作品かもしれないよ」
C「Y大関係者のみ投稿可って決めておくべきだったのよ」
M「そうしたら何の発展性もないよ。文学っていうのは誰にでも平等なのよ。どこにでも成り立つものなのよ」
D「なんっちゃって、かっこいいこと言うわね」
F「でも今回も、前回よろしくエロ物のテンコ盛りってことになるんじゃないの？」
M「とにかく、作品が投稿されてからの話よ。果報は寝て待

てって言うからね」

＊みんな笑いながら頷き合う。

「完」